

氏 名	木 南 卓 一
	き なみ たく いち
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 49 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 45 年 1 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	朱子學の本質

論文調査委員 (主 査) 教 授 重 沢 俊 郎 教 授 小 川 環 樹 教 授 佐 伯 富

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は序論を別にして全十章から成り、「朱子学の本質」を、その形成過程および構成諸要素の分析と検討を通して解明することを目的とする。

著者はまず序論において、本文十章の個別的考察が本論文の目的を達成するために不可欠かつ最も有意義である所以を指摘した後に、要旨次の如き本論に進む。

{第一章 程子敬自証の経緯 第二章 二程子の理解

1. 朱は李延平・張南軒などの影響をうけつつも、なおそこに止まることなく、最後に程伊川の敬説を自証するに及んで、始めて物に即して理を窮める道を開く自己の定論を樹立することができた。

2. 朱は比較的には、明道よりも伊川の学説に近い立場をとっている。

第三章 周濂溪の理解 1. 朱は周の「無極而太極」の説を、太極の理としての形而上性を明らかにするものと評価した。2. 太極図説において、太極の部では本体論が、人極の部では心性論・徳論・修為論が、それぞれ説かれている点は、二程の未だ及ばなかった所で、朱の思想をを大いに鍛錬したと認められる。

第四章 張横渠の理解 1. 張の「西銘」に対して性理学的観点から考察を加えた朱は、孝の倫理を天地萬物一体的に徹底させたことに見られる張の独自の思想が、結局において性理学の体認を豊かにするものであることを高く評価した。

2. 張の「正蒙」に見られる世界解釈および「心は性情を統べる」との見解に対する朱の深い関心は、すべて朱による宋学の集大成に役立っている。

第五章 陸象山と朱子 1. 心の靈活なるままに理が顕われると見る陸の「心即理」の説に対して、「性即理」を主持する朱の見解の特徴は、理の純粹至善性を形而上的に観ることが根本で、それによって心の靈が得られるとなし、従って心の靈も人間においては動における悪への傾向を免れ難いと看る点に発見される。

2. 「無極太極」の解釈に関しでいえば、極を「中」と解する陸説に対して、朱は「理の至極」と解する形で、両者の差異があらわれている。

第六章 論語の解釈 論語集注の最も重要な特徴は、聖人孔子の境地を全的と見、それを「渾然天理」「天理流行」など、性理学的な究極の境地を表わす概念を用いて説いたことにある。

第七章 孟子の解釈 朱の孟子解釈の要点は、孟子の心性説の性理学的解釈にある。

第八章 中庸の解釈 1. 朱の中庸解釈の要点は、中庸を大学・論語・孟子を会通し且つ敬を説くものと見たこと、および存養省察の修為をも説いていることにある。

2. 中庸の「誠」を、「渾然天理」「真実無妄」の面と、「戒慎恐懼」の敬の面とで、性理学的に重要視しているのが、朱の解釈の特徴である。

3. 中庸は道統の伝を重要視したものと朱は解する。

第九章 大学の解釈 1. 中庸が宋学の初期から易と共に尊信されたのに対し、大学は程伊川を継いで朱熹が始めて顕彰した。朱が特に重要視したのはその修為論であるから、性理学は「大学章句」で完結しているといつてよい。

2. 「格物」の物は、心身人間の関係など天地間のすべての事象をいい、心も理を具えたものとしての物である。「格物致知」は「心即理」ではなく、天下の物について「性即理」的に物を観て、その理を観る心の神明靈知をつくすことと朱は解する。これで敬の学説は完結する。

第十章 理を中心としてみた朱子学の本質 1. 北宋四学者の理解、四書の解釈、および陸象山との論争を通観すれば、朱熹が宋学の集大成者とされる所以は極めて明らかといえる。しかし、朱子学の最も根本的な性格は、理の一字をもってその全体を表わすことができる点にある。

2. 理は本体論・心性論・徳論・修為論の根底であり、それは物に即し、また氣に即して観られるものである。

以上が十章の要旨である。そして最後に、朱熹をして宋学の集大成のために生涯をかけさせた最も根本的な原因は、老荘・仏教は固より、北宋儒学そのものの在り方についてさえ彼が禁じえなかった深刻な危機観であったと、著者は考えている。

論文審査の結果の要旨

この論文の評価に値いする特徴は、第一には朱熹の哲学思想の形成過程を歴史的に追跡することによって、その本質的的確な解明に達しようと試みた点にある。朱熹が発展的に継承した北宋四学者の学説に対して、著者が加えたきめ細かな分析と考察は、この研究の目的のために非常に有意義な成果をもたらしていると認められる。

第二には朱熹のあらゆる著作を広く考究の対象にしつつ、その中心に四書の注解をおいた点に求められる。朱熹が畢生の努力を傾注した最高の労作であり、その哲学思想の集英と考えられる四書注解の精密な検討こそが、「朱子学の本質」を徹底的に闡明する最も確実な方法に外ならないとする著者の見識は、本論文の成果によってその正しさが立証されており、高く評価されてよい。

朱熹の哲学思想に関する研究はわが国において決して少なしとしないが、ややもすれば主観的独善的見

解に陥り易い弊害が多いように思われる中であって、著者の研究は朱熹の思想を多少なりとも発展的観点に立って考察し、宋学の集大成となすに足る所以のものを客観的に明らかにしようと試みた点で、学界に新たな局面を開くものと称して過言ではない。

このような積極面を有するにも拘わらず、著者が従来の朱熹研究の通弊から依然として完全に脱却しているとはいえない弱点をもっていることも事実であり、また豊富な資料を捉えながら、その歴史的意義を必ずしも十分正確に生かし得ない場合が見られるのは、遺憾という外はない。しかし、これは著者将来の努力によって必ず克服されるべきものと信じられる。

以上により、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと判断される。